

子どもたちに寄り添って続けていきたい

当時の子どもたちの想いに動かされ、国や関係機関を挙げて保全活動に取り組んできました。それ以来25年間、1年も欠かさず子どもたちと活動してこれたことは私たちの誇りです。

メダカは繁殖力の強い生き物ですが、環境の変化に弱く、適切な環境でないと数を減らしてしまいます。圃場整備の悪影響にいち早く気づいた子どもたちのおかげで、メダカの命を救うことができました。

メダカを守りたいという発想も、メダカ米を作りたいという気持ちも、子どもたちが主体的に行動を起こしたからこそ始まった活動です。子どもたちがこのような課外活動を行うことで、多くの関心を持ってもらえます。また、子どもたちから活動の感想文をもらえることが私たちの励みになっています。

今の子どもたちは自然と触れ合う機会に縁がありません。地域との交流を通して、魚に触れ、田植えや稲刈りを経験し、庄内町で生まれたことを誇りに思っています。

小学校の先生や関係機関のご理解、ご協力があり活動を続けることができています。今後も子どもたちに寄り添い、保全活動を続けていきたいです。



特定非営利活動法人

家根合生態系保全活動センター

理事長 大井庄一さん (左)

前理事長 佐藤昭一さん (右)

佐藤さんはNPO発足当時から理事長を歴任。令和5年度、大井さんにバトンタッチしました。



今年で25周年を迎えた「メダカ保全活動」。平成11年、当時の子どもたちの「絶滅危惧種を守っていこう」という想いから生まれたこの活動。本特集では、メダカとの共生を目指す人たちを紹介します。

メダカと共生する未来へ

メダカを守りたい。
子どもたちの想いが叶えた
メダカとの共生

●メダカ保全活動の始まり

家根合集落は最上川水系の末流のため、常に水不足に悩まされていましたが、昭和50年代に庄内各地で行われた圃場整備に遅れをとっていました。平成8年頃に満を持して圃場整備に取り掛かり、平成12年に事業着工を予定していたところ、時を同じく、余目第一小学校5年生が総合学習で絶滅危惧種に関わる学習を行っていました。当時の家根合集落は良好な自然環境に恵まれ、メダカをはじめ、いろいろな生物が生息していました。が、圃場整備によって豊かな自然環境が失われる恐れがあり「メダカを救いたい」という気持ちが生徒たちに芽生えました。これがメダカ保全活動の始まりです。

●メダカと共生するために

その後は同校児童と圃場整備関係者によるメダカの保全につ

いての話し合いや、検討会が開かれ、関係者も環境保全を盛り込んだ整備に同意。整備計画を練り直すことになりました。併せて、子どもたちと関係者によるメダカの捕獲（メダカSOS救出作戦）が実行され、田んぼに接続した水路でメダカを捕獲。捕獲したメダカは、集落内の仮設保全池に移されました。その後平成15年に完成したメダカ保全池（通称メダカ池）に移され、安心安全な環境のなかで暮らしています。



△余目第一小学校5年生と圃場整備関係者の話し合い

●NPOの活躍

メダカ池は、同年に設立された「特定非営利活動法人家根合生態系保全活動センター」（以下

●小学生とメダカ

小学生による活動は1年を通して行われています。同校では、保全活動を学校の年間授業に組み入れ、生態系の調査、観察などを行い、地域との交流を深めています。活動の一部を紹介します。

・メダカの学習

NPOから講師を招きメダカの生態や種類、生育環境や、メダカ池でメダカを観察し学習。

・田植え体験

家根合集落にある佐藤さん（NPO前理事長）の田んぼにはだしで入り、手作業で田植えを行う。

・メダカの放流

田植えをした田んぼにメダカ池のメダカを放流。メダカが棲めるきれいな環境をつくる。

・メダカの捕獲

田んぼで増えたメダカをメダカ池に引越させるため捕獲する。

・稲刈り体験

子どもたち自身が植えた稲を自ら鎌を持ち収穫。稲は自然乾燥した後、お米となって子どもたちに届けられる。

・魚の学習会

家根合の揚水機場で様々な魚を捕まえ、種類や生態を学ぶ。



△メダカ保全池（家根合）

活動を終えて

今年度、実際にメダカ保全活動に携わった小学4年生のみなさんにお話を伺いました。



いちか 庄司衣千夏さん(館)

たいが 佐藤大河さん(館)

いと 國井結糸さん(松陽)

学校で学んだメダカの学習を通し、メダカがいろいろな困難を乗り越えてやっと生き残れてきたことを知りました。メダカにとって住むことが大変になってきていることがかわいそうだと思います。

下級生たちには、環境を傷つけないようにしてほしいと学校祭で伝えました。登下校などで花や草をむしり取ってしまう下級生たちを見かけます。メダカやほかの水生生物と同じく、植物も大切に思っています。

田植え体験では、みんな最初はドキドキしていたけれど、やってみたら楽しかったです。オタマジャクシやタニシなど、いろいろな生物に触れることが出来ました。後輩のみんなにも、最初は田んぼ入ることを嫌がるかもしれませんが、メダカのためだと思って踏ん張ってほしいです。きっと楽しく活動できるはずです。

実際にメダカについて学んでみて、メダカが生きていくための環境が整っていないと実感しました。投げ捨てられたゴミなどがメダカを住みづらくしていて、実際に集落の用水路でもメダカを見かけることはなくなっています。安心してメダカが育つことができる場所が必要だと感じました。

学校祭では「メダカの学校」と題した劇を披露しました。メダカのことを知らない下級生に、メダカが抱える大変さや一小とメダカの絆を伝えられるように頑張りました。後輩たちには、一小の伝統をつなぎ、これからもメダカを助けていってほしいです。

メダカが安心して暮らしていくためには、自然環境に配慮することが大事です。ゴミのポイ捨てはしない、ゴミ拾いを積極的に行う、この意識を高く持っていきたいです。

数年前からまちづくりセンターの事業でメダカの捕獲体験に参加していましたが、以前よりメダカの数が減っていると感じていました。授業でメダカを取り巻く環境を知り、かわいそう、助けてあげたいと思いました。

人生で初めての田植え、稲刈りは、想像以上に泥がぐちゃぐちゃでびっくりしたけれどとても良い経験になりました。NPOのみなさんに手伝ってもらったからこそ楽しめました。

学校祭で披露した劇では、メダカの大変さを下級生に知ってもらい、4年生になってメダカについて学ぶ時に、これからも自分たちがメダカの助けになるという意識を持ってもらえるように頑張りました。後輩たちには、メダカがいなくなりそうだということを感じて、メダカを大切にしていこうという気持ちを持って活動に取り組んでほしいです。



- 1 メダカクイズ
- 2 田植え体験
- 3 メダカ放流
- 4 メダカ捕獲作戦
- 5 稲刈り体験
- 6 学校祭
- 7 魚の学習会
- 8 メダカ米贈呈

メダカ保全活動は、始動以降、子どもたちが自然環境を慈しむ心を育てる重要な機会となっています。在校生だけでなく卒業生にとっても、余目第一小学校ならではの特色ある、自慢できる学習ではないでしょうか。

今回、春からNPOの方々や保全活動に励む子どもたちと接し、地域の良さを再発見し、郷土を愛し大切にすることに触れることが出来ました。子どもたちは地域の方々に感謝し、地域の方々は子どもたちの健やかな成長を願う、温かい心に支えられている活動だと思います。

メダカと共生する未来のために、活動を風化させず、次の世代へ継承することが大切です。今後とも家根合集落から「郷土愛」を発信していきましょう。

エピローグ 「郷土愛」

メダカと共生する未来のため

